歴史的および音声的観点から見たニョロ語声調の特徴

梶　茂樹
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

アフリカのウガンダ西部には、アンコレ語、キガ語、トーロ語、ニョロ語など系統的に近いバンツー系の言語がいくつか話されている。面白いことに、これらの言語は全体としてお互い非常に似ていながら、声調の体系は異なる。これら 4 言語では、名詞は、孤立形では H は 1 音節にしか現れないが、アンコレ語ではこの H はどの音節にも現れうるのに対して、トーロ語では次末音節のみ、そしてニョロ語では次末音節と末尾音節の 2 音節にのみ現れる（キガ語はデータ不足だがアンコレ語と同じ体系だと思われる）。

通時的観点からは、これらの言語は、全体としてアンコレ語的体系から、ニョロ語、トーロ語的体系へと変化していることが見て取れる。興味深いのは、これらの言語は、日本語アクセント研究の用語を用いれば、アンコレ語は東京方言的であり、トーロ語は 1 型、ニョロ語は 2 型アクセントタイプであるということである。

本発表では特にニョロ語声調の音声的特徴を取り上げ、その体系がトーロ語的体系へと変化していることを示す。ニョロ語の基底の /…HL/ は孤立形では音声的に […FL] で現れ、基底の /…LH/ は […HF] で現れる。

(1) a. The penultimate H is realized falling in isolation.
　　b. when the penultimate syllable is short: /o-ru-lími/ → orulîmi　“tongue”
　　c. when the penultimate syllable is long: /e-ki-sáɛ́tu/ → ekisâɛ́tu　“dry animal skin”
(2) a. The ultimate H is anticipated by one syllable, and the original H is realized falling.
　　b. when the penultimate syllable is short: /o-ru-birá/ →orubírâ　“inner waist belt”
　　c. when the penultimate syllable is long: /e-ki-endʒú/ → ekyéɛ́ndʒû　“banana”

ところが、この[…HF] と […FL] は、次末音節が 1 モーラの場合、極めて聞きづらい。次末音節が 1 モーラの場合は、(2b) の例における語末の F が明瞭ではなく、また(1b) の例における次末音節の F も明瞭ではなく、両パターンは混同されやすい。ただ、(1c) の例のように、次末音節が 2 モーラの場合は、F がはっきりと聞こえる。また(2c) の場合も次末音節が 2 モーラであるため、H が引き延ばされはっきりと聞こえる。もっとも、この聞きづらさも、名詞の後に、例えば「私の」のような語が続き、ポーズの前という条件が外れれば、解消する。

(3) a. /o-ru-lími ru-ánge /　→　orulími rwâɛ́nge　“my tongue”
　　b. /e-ki-sáɛ́tu ki-ánge/　→　ekisáɛ́tu kyâɛ́nge　“my dry animal skin”
　　c. /o-ru-birá ru-ánge /　→　orubírá rwâɛ́nge　“my inner waist belt”
　　d. /e-ki-endʒú ki-ánge / →　ekyéɛ́ndʒú kyâɛ́nge　“my banana”

以上のことは、2 型タイプであるニョロ語において、名詞の基底の/…HL/ と/…LH/ が一定の条件のもとで中和しつつあり、結果として 1 型のトーロ語的体系へと変化していることを示しているように見える。